

講演概要

演題「新しい時代の学校教育の在り方について考える
～学習指導要領の着実な実施を踏まえて～」

【講師】

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター
研究開発部教育課程調査官・学力調査官

鳴川 哲也先生

新しい時代の学校教育の在り方について考える

～学習指導要領の着実な実施を踏まえて～

講師：文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター

研究開発部教育課程調査官・学力調査官

鳴川哲也先生

開催日：令和3年6月12日（金）

今回の講演では、「附属小学校の研究内容と学習指導要領の関係」「見方・考え方」「GIGAスクール構想」の3つを大きなテーマとする。

1 附属小学校の研究主題と学習指導要領の関係

今年度の研究主題は「学び続ける子供が育つ授業の創造」であり、対話に着目して「学び続ける子供の様相を明らかにする」ことである。

なぜ今「学び続ける」なのかという問いに対して、研究主題設定の理由から分析すると、1つ目は「予測困難な時代」、2つ目は「育成を目指す資質・能力」、3つ目は「個別最適な学び、協働的な学び」、4つ目は「新たな価値の創造」がキーワードだと分かる。「学び続ける」ということについて、新学習指導要領のキーワードと一緒に附属小学校の研究内容について迫っていく。

学び続ける子供が育つ授業の創造 ー対話に着目してー ～「学び続ける子供」の様相を明らかにする～	
なぜ「学び続ける」なのか？	
I 研究主題設定の理由 1 なぜ、今、「学び続ける」なのか より	
■ 社会の在り方そのものが「非連続的」と言えるほど現在とは劇的に変わるとされるSociety5.0の時代の到来が予想されている	予測困難な時代
■ 社会変化の中で、子供たちが変化を前向きに受け止め、豊かな創造性を備え、持続可能な社会の創り手として、予測不可能な未来を自立的に生き、社会の形成に参画するための資質・能力を一層確実に育成することが求められている	育成を目指す 資質・能力
■ 社会や自分を取り巻く環境、あるいは他者との関係の中で、自ら問いを見いだし、問いの解決に向けて他者と協働し、粘り強く取り組む中で知識やアイデアを共有し、新しい解や納得解を生み出す力が必要	個別最適な学び 協働的な学び
■ 学習したことが生活と結び付き、社会の中でどのように役立つのかまで考え、求め続けることが重要	新たな価値の創造

(1) 予測困難な時代

今回の小学校・中学校・高等学校の学習指導要領の解説の総則編において、「予測困難な時代」というキーワードがたくさん出てくる。この学習指導要領を改訂した当時、AIの急速な発展に伴って、この先を見通すことが難しいということで、「予測困難な時代」というキーワードが出てきた。今、コロナ禍はまさに予測困難な時代である。そのような「予測困難な時代」というキーワードの中で、学校教育に求められているこ

とが総則編に3つ書かれている。

1つ目は「子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくこと」、2つ目は「様々な情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し、情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと」、3つ目は「複雑な状況の中で目的を再構成することができるようにすること」である。

見通しがもてない状況で、諦めてしまい、前に進まない子供ではなく、困難な状況や変化に積極的に向き合って、自分一人ではなく、友達と協働しながら、目的をもう一度見つめ直し、たくましく前に歩み続けることが求められている。このことは、まさしく附属小学校が求めている「学び続ける」に合致している。「学び続ける」は、新学習指導要領の「予測困難な時代」という点においても重要なキーワードである。

(2) 育成を目指す資質・能力

今回の学習指導要領において、資質・能力は一番重要なキーワードである。資質・能力を3つの柱で整理すると、「生きて働く知識及び技能」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等」となる。我々が今、新学習指導要領の中で育成を目指す資質・能力は、その教科のその時間の中だけで発揮されるものではなく、子供たちが大人になってからも使える資質・能力として育成していかなければいけない。

「知識及び技能」については、今回の改訂においては知識の理解の質を高めることが重視されている。個別ばらばらな知識として獲得するのではなく、関係付け、つなげながら概念として理解していくことが大事である。

「思考力・判断力・表現力等」については、知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な力と規定されている。学び続ける子供が問いを見いだして、それを解決していく中で必要になる力として位置付けられている。

「学びに向かう力、人間性等」については、他の2つの柱をどのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素である。いくら知識が豊富でも、いくら思考力・判断力・表現力が豊かであっても、その力をどの方向に働かせるのか、人類が幸せになる方向に使うのか、不幸せになる方向に使うのかということを決めるのは、この「学びに向かう力、人間性等」であるため、非常に重要なのである。

「学びに向かう力、人間性等」については2つに分かれる。1つ目は、主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力で、「メタ認知」に関するものである。2つ

目は、多様性を尊重する態度や協働する力で、「チームワーク」「感性」「思いやり」「優しさ」などである。

(3) 個別最適な学び、協働的な学び

令和3年1月26日に中教審答申で出された『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して』では、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」という言葉が提示された。この内容は、決して新しいことを言っているわけではなく、新学習指導要領に基づいて学習指導をしっかりと行うべき内容になっている。

個別最適な学びについては、「指導の個別化」と「学習の個性化」という2つの言葉が出てくる。「指導の個別化」とは、基礎的・基本的な内容を一人一人にしっかりと定着させるために、個に応じた指導が必要だということである。「学習の個性化」とは、一人一人の学習のプロセスは同じではないということを理解し、一人一人の学習も個性化が図られる必要があるということである。

このように考えると、「学び続ける子供」という研究テーマは、一人一人を大事にしながら、一人一人に力を付けることにつながる。

学校教育法30条第2項に示されている学力の3要素にも、「個別最適な学び」「協働的な学び」について触れられている。学力の3要素とは、確実に習得させたい基礎的・基本的な「知識及び技能」、これらを活用して課題を解決するために必要な「思考力・判断力・表現力等」、「主体的に学習に取り組む態度」と言われている。その3要素に、「個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること」が加筆されている。

なぜ学力の3要素にこの内容が加筆されたのか。解説の総則編には、変化が激しく予測困難な時代の中でも通用する確かな学力を身に付けるために、自分のよさや可能性を認識し、それを個性として生かし、多様な他者を価値のある存在として尊重しながら協働して様々な課題を解決していくことが重要だと書いてある。ここにも個別最適な学びと協働的な学びのことが含まれているのである。

個別最適な学び、協働的な学び

新しい時代の教育の在り方について

確かな学力

小学校学習指導要領（平成29年告示）第1 小学校教育の基本と教育課程の役割 2（1）
中学校学習指導要領（平成29年告示）第1 中学校教育の基本と教育課程の役割 2（1）
高等学校学習指導要領（平成30年告示）第1款 高等学校教育の基本と教育課程の役割 2（1）

基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること。

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編
中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編
高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編

変化が激しく予測困難な時代の中でも通用する確かな学力を身に付けるためには、自分のよさや可能性を認識して個性を生かしつつ、多様な他者を価値のある存在として尊重し、協働して様々な課題を解決していくことが重要であることから、学校教育法第30条第2項に規定された事項に加えて、「個性を生かし多様な人々との協働を促す」ことを示している。

(4) 新たな価値の創造

附属小学校の研究は、「新たな価値」というものを重視している。今回の改訂の前に出された答申には、学校教育を通じて子供たちに育てたい姿の3つ目に「新たな価値を創造していく」という言葉が出てきた。

「新たな価値」とはグローバルな規模でのイノベーションのようなものだけでなく、地域の課題や身近な生活上の課題等を自分なりに解決し、自他の人生や生活を豊かなものとしていくという工夫なども含む。Education2030プロジェクトというOECDのプロジェクトの2030年に向けて必要となるコンピテンシーの一つにも「新たな価値を創造する力」が書かれている。「新たな価値」は、世界的にも大事な潮流である。

2 見方・考え方

(1) 学習指導要領の解釈

今回の学習指導要領には「資質・能力」、「見方・考え方」、「主体的・対話的で深い学び」等、たくさんのキーワードが出てくる。これらのキーワードの関係性について説明する。

「資質・能力」は「育成する」と言うが、「知識及び技能」は育成ではなく「習得」と言っている。「習得」は、ある程度の短い期間で子供が獲得できるという意味である。

「思考力・判断力・表現力等」は「育成」と言っている。「学びに向かう力・人間性等」、これは「涵養」と言っている。「涵養」とは、長い時間をかけてゆっくり育てるという意味である。

「習得」、「育成」、「涵養」という言葉の違いを理解することによって、一体どのぐらいの期間で子供たちに育成していくのか。または、どのぐらいの期間で見取り、評価をしたらよいかが見えてくる。

次に「見方・考え方」である。附属小学校の研究主題である「学び続ける子供」の説明の中に、「見方・考え方を働かせる」という言葉がある。「見方・考え方」は、「資質・能力」を育成する活動の中で働かせていくものである。

「資質・能力の育成」を目的として、「見方・考え方」を働かせながら問題解決をしていく授業を構想する。その中で、主体的・対話的で深い学びになっているかということが授業改善の視点となる。

(2) 資質・能力

各教科の学習指導要領の「教科の目標」には、「通して」という言葉がある。「通して」の前の文や言葉を見ることによって、その教科で大事にしている学習活動が書かれている。どういう学習活動を通して資質・能力を育成するかというと、算数科で言えば「数学的活動」、理科で言えば「問題解決の活動」である。そこで、対話、つまり協働的な学びも大事にしている。

問いを見いだして、みんなで解決していくことが学び続ける子供の様相だという説明の中で、学習の基盤となる資質・能力として今回3つ挙げられている中の1つ、問題発見・解決能力と合致する。当然、言語能力も情報活用能力もそうだが、問題発見、つまり、みんなで解決したい問題を見つける。そのために問いをつくる対話ということが重要であり、この問いが共有されたときに問題を解決する。このように、問いをつくり解決するということは、まさしく問題発見・解決能力というところにもつながる。これはどの教科でも大事にしていくべき資質・能力である。したがって、附属小学校はこのような学び、学習過程を考えて提案している。

しかし、この学習活動、学習過程が全ての教科に合致するような学び方なのか、学習過程なのかということは気になる。自分の考えに自信をもち、それぞれ考えA、考えB、考えCがあって、ズレがあって、そこから問いが生まれると書いてあるが、理科ならばどのように解釈すればいいのかと自分の中で問いが生まれた。それぞれの教科の学び方、学習のプロセスとこの研究の学習過程というものはどのように関連するのかということをもっと知りたい。

(3) 見方・考え方

そもそも「見方・考え方」についてどういうふうに理解をすればよいか。今回、「見方・考え方」は、物事を捉える視点や考え方として整理されている。そして、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核を成すものとか、または、教科等の学習と社会をつなぐものとか、子供が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようすることがかなり重要だと書かれている。

さらに、「深い学び」の視点に関して、各教科等の学びの深まりの鍵となるのが「見方・考え方」であるという説明もある。新しい知識・技能を既にもっている知識・技能と結び付けて、社会の中で生きて働くものとして習得する。つまり、使える知識として習得するために重要だ。また、「見方・考え方」は、思考力・判断力・表現力等を

豊かなものにするためにも重要だ。そして、我々が社会や世界とどのように関わるかの視座を形成するためにも重要だと書いてある。しかし、我々はこの「見方・考え方」の理解を、もっと深めていかなければいけない。

理科では、「見方」と「考え方」は分けて整理している。理科の「見方」はエネルギー、粒子、生命、地球という4つの領域に分かれているので、それぞれの領域に特徴的な見方として捉えている。エネルギーは、高等学校になると物理という科目になる。そのため、物理に関する学習をするときには、この量的・関係的な視点を働かせることが多くなる。子供の言葉で言うと、「一方の量が変われば、それに伴ってもう一方の量も変わるか」ということである。

「お〜い、お茶」のペットボトルを持って、いろいろな教科調査官をめぐった。「造形的な見方でこれを見るとどういうふうに見えるんですか」と図画工作科の調査官に聞くと、「これは何をイメージしているのかな、竹筒かな」と言った。家庭科の調査官は「持続可能な社会の構築」の見方・考え方を働かせ、「ペットボトルと紙パックのお茶のどちらを飲んだほうがリサイクルとして効率的なのか」と言った。社会科の調査官は「どこで作られて、どういう流通経路をたどってここに来たのか」「そもそもお茶というものをペットボトルに入れて売り出したのはいつ頃からなんだろう」と言った。国語科は、言葉による見方を働かせ、『お〜い、お茶』の『〜』という部分を手で隠して読むと、『おい、お茶』になる。『お〜い、お茶』と『おい、お茶』の状況が全然違うという問題が生まれる」と言った。

ここで分かったことは、1つの物を見ても、いろいろな教科の見方で見ることによって、その見方が反映された問題、問いが生まれるということである。どの教科の見方が正しくて、どの教科の見方は正しくないということはありません。どの教科の見方も大事である。

今回の見方・考え方というのは、このように、いろいろな見方で1つの物を見られるようになればよいということである。これが世の中のことを見るときの視座を形成するということである。

(4) 学習対象と関わる際の見方・考え方の働かせ方

学習対象と関わる際に、子供はどのように見方・考え方を働かせながら試行錯誤を繰り返して必要感を持って追究し、自信のある考えを構築していくのか。

理科「燃焼の仕組み」を例に挙げる。ろうそくが消えた現象を見て、実体的な見方を働かせた子供には、「瓶の中の空気がなくなったから消えたんじゃないか」という問いが生まれる。しかし、質的な見方を働かせている子は「瓶の中の空気が古くなったんだよ」と言う。このように、1つの物を見ても働かせ



ている見方が違う。ここで対話するときには、当然、その子供が見付けた問いの背景にある見方が違うことを理解しなくてはいけない。対話を通して学習を進めるのであれば、ここでどんな見方を働かせているかということまで、子供たちもお互いに意識する必要がある。附属小学校の研究は、見方・考え方を子供が意識することが大事である。

今回の学習指導要領になり、私自身も見方・考え方を意識して働かせようと試みている。ユリノキという街路樹がある。自然観察会に参加したとき、ユリノキの葉っぱが大きかった。「この部分で大きな葉を支えているのですよ」と自然観察会の先生が教えてくれた。ものすごく大きい葉を1点で支えていると知ったとき、すごいなと思った。そんなとき共通性・多様性という見方を働かせたくなってしまう。「ユリノキだけではなく、他の植物はどんなつくりになっているのか」と一瞬にして想像をめぐらせてしまった。そうすると、「この植物も支えていた。あの植物も支えていたな」と気付いた。観察会で、このユリノキの1個だけを教えてもらったのに、共通性、多様性を見方を働かせると、「他の植物はどうなっているのだろうか」と目の前の視界が一気に開けていく感覚があった。

学び続ける子供の姿について、私は納得できるまで考え続け、自分の考え、表現をつくり上げることだけではないと考える。

授業中、子供に「ピンポン玉の半分に光が当たっていると、もう一方の半分が照らされていないでしょう？」という話をよくしていた。この照らされている部分を「知」の世界、反対を「未知」の世界とすると、勉強すればするほど知識が増える。知識が増えるということは未知も増える。知れば知るほど、自分にはまだまだ知らない世界があるということに気が付くことも学び続けるという姿ではないだろうか。学び続ける様相とは、問題を解決して「これは絶対間違いない」と考えをもつと同時に、自分

にはまだまだ知らないことがあると謙虚になることでもあると思う。だから、分かると同時に知らないことが見付かるということにも喜びを感じることに価値を置きたい。

3 GIGAスクール構想

GIGAスクール構想がスタートして、小学校には1人1台端末が整備された。理科を例に挙げるが、1人1台端末を使うことそのものが目的ではない。それを活用することで、子供たちの資質・能力を一層図っていくことが大事である。その端末を使うことで子供たちの資質・能力が育成されるような使い方はどうあるべきかということを考えなければいけない。

端末の活用の仕方としては、情報を集めたり、動画を撮って事実を捉えたり、ポートフォリオのように学びを蓄えたり、見方・考え方で事象をつなげてみたり、認識を深めてみたり、問題を見いだしてみたり、根拠を探してみたり、あるいは、全国の子供たちと情報交換をして問題解決してみたりするなどといったことが考えられる。

文部科学省としては、StuDX Styleというようなウェブサイトを構築して逐一情報を発信しているので活用してほしい。

子供が端末を家に持ち帰ることができるようになった。子供の学びというものは、学校の中で終わるのではなく、学校での学びがきっかけとなり家庭での学習が充実し、家庭での学習が学校の学びに往還されることが理想である。学校は問題を追求するところ、家は宿題をするところではなくて、子供が学び続けるといったときに、この1人1台端末は非常に有用なアイテムになると思う。

附属小学校の「学び続ける子供」というものは、学校と家庭の往還の中で見えてくる子供の姿でもあるので、この点での研究も進めてほしい。